

令和三年度

俳句教室

学園祭展示作品

校庭の雪だるま九九聞いてをり

長谷川 洋子

学校の近くを通った時、校庭に子供たちが作ったと思われる雪だるまが、ぼつんとありました。そして教室からは、かけ算九九を唱える声が聞こえて来て、まるでそれを雪だるまが聞いているように思えました。

班雪笹蒲鉾の焦げ目美し

横須賀 智

かつて観光で訪れて食べた笹蒲鉾は、美味で焦げ目が淡く美しかった。それは雪がまだ解けきらず畑や山肌に残る様子を思わせた。大震災の時流された蒲鉾工場が復興し、製造を再開した様子をテレビで見た。災害に負けず生きる人々の逞しさに希望が見えた。

梅東風や産毛の光る子の笑顔

西村 悦

梅の花の咲く春の日。暖かい東風が、幼い子の顔をなでていきます。大人たちに囲まれて、笑っている子供の顔にお日様が当たっています。何事もなく元気に育ってほしいという願いもかねて詠みました。

初蝶や淡き黄色の道案内

羽鳥ゆき

夕方散歩をしていると、偶然目の前に蝶が現れて、恰も道案内のように、私を誘導してくれました。その時の様子を詠みました。

変わる世に変わらぬ絆母子草

新井 朋子

かつて経験の無いコロナ時代。心配してくれる子供たちの声が心に沁みて、母子草にかけて詠んでみました。母子草は春の七草の一つです。

はち切れんばかりにジャージ夏かな 森戸 諒

野球の練習の帰りと思われる自転車の一団に逢いました。皆、はつらつとして、若さにあふれていました。五月の光の中を走る若者達を羨ましく見送りました。

万緑の中切り裂きて滝落つる

西野 信

毎年有楽町の東京フォーラムの前の街路樹の西洋栃の木(マロニエ)を見に行っています。今年は五月十二日に行きました。満開でした。薄ピンク色に咲いている全ての花が、掌を合わせて、天に掲げて咲いていました。その美しさに感動して詠んだ一句です。

「合掌」を天に掲げて栃の花

斎藤 文

関東では有名な滝として袋田の滝、華嚴の滝、吹割の滝等が頭に浮かぶが、皆水量が多く形も違い観客で賑わっている。私はそれよりも山間にひっそりと姿を見せる滝の方が好ましく思っている。山深く行くと突然姿を現す滝が、緑の中を一直線に流れ落ちる様子を匂にしてみました。

なないろのよひらの原種永遠なれと 熊崎 知恵子

花の国日本の誇る固有の原種のがくあじさい。素材で可憐な美しい花。太古より変わらずに咲き続くこの花が、後世の人々にリレーのように咲き続いていくように願いを込めて詠みました。

さくらんぼ摘み取る吾子を肩車 松坂 麗子

サクランボ摘みに行き、届かない子供を肩車してあげた。いつまで肩車してあげられるかなど、育っていく子供の未来を思い描いた。

孫の手を借りて賑わふ梅仕事 佐藤 芽衣

今までは一人で黙々としていた梅仕事でしたが、孫達がお手伝いに参加してくれました。とても楽しい行事になりました。彼等の成長に感謝です。今年の梅がいつもより香りまで芳しく感じました。

片陰や子も左行く母のあと 安部 洋輝

真夏の日盛りの中を西向き道を歩いて、暑さを避けようと左側の日陰に入りました。少し前を母子二人連れが同じく左側を歩いていました。やはり暑さ除けに片陰に入っているのだと思いました。

夏富士や園をあかりが登る見ゆ

丸山文子

私がこの句を作ったのは二十数年前、姉妹四人揃って両親の故郷、山梨へ遊びに行った夜の事です。「ほら見て。富士山に登る灯が見えるよ」と言われ、見ると、ほの暗い灯が一系列に並んでちらちら動いていました。大勢の人たちが富士山の頂上を目指して登っている光景に思わず見とれた思い出です。

上がりゆく朝霧笑まふ六地藏

塩崎 みつえ

信濃路の旅での光景、朝霧で目の前が真っ白でしたが、しばらくして急に霧が上がり、六地藏が並んで優しそうに微笑んでいました。その時の感動を句にしました。とても心が落ち着いて幸せな気持ちになりました。

とりどりの尾瀬の池塘の良夜かな

高間 恭子

三十年ほど前に行った尾瀬の池塘は昼間の強い光にすべてが同じようにきらきらと輝いていました。先日テレビで見た池塘は穏やかな月の光の下、それぞれ違う色の微かな輝きを湛え、そこには昼間とは全く違った尾瀬の神秘的な世界が広がっていました。

たまゆらに方丈記など秋燈

田中 京

毎日忙しい生活をしている中、ほんの少し古典を繙く時間を見つけて、方丈記の世界に浸った夜のことを詠みました。傍らの灯りが、秋のひんやりと澄んだ夜気のせいで、静かで沁み沁みとした心持にしてくれました。

人疎ら夜の浅草に秋思増す

浅賀郁子

先日、友人が浅草で撮った写真を葉書にして送ってくれました。普段は人がいっぱい、なかなか思うように撮れないのに、あまりにも閑散として、撮れたはいいけど、この先の経済に不安を感じたと言っていました。それぞれが注意を怠らず、少しずつ戻っていかればと思います。

丸窓や切り取る眺め柿紅葉

小西 和男

旅館の窓からは、山を借景に二本の柿の木が、枝を八方に張り、一杯実を付けて、あたりを柿色に染めていた。秋たけなわの風景だった。

花八ツ手くぐりて子らの秘密基地

吉原 さち

小さな白い花を賑やかに咲かせても、庭の片隅の八ツ手の周りは寂しい。でもいつとき子供達の声がとび交い何やら賑やかになる。てらてら光る天狗の団扇のような葉に、子供達は誘い込まれたのかも知れない。

携へし手の温もりや初時雨

小林 かづ

母がまだ存命で、車椅子のお世話になる前の思い出の一コマです。一日に一度散歩する習慣でした。夕べの公園で、いつものように繋いだ手に温もりを感じたのは、冬の到来を告げる時雨の所以でしょうか。

雪催い重曹拭きの窓白し

藤田 笙

窓掃除は曇りや雨の日が最適と言われてるので、湿気があれば良いかと今にも雪が降りそうな日に、手作り重曹洗剤を使った結果、いつも以上の達成感がありました。

